

表 6 マダイの種苗生産飼育結果

年 度	使用水槽	仔魚収容数	飼育日数	取場尾数	全 長	歩留り	沖出し月日
	t	尾	日	尾	mm	%	
昭和56年	0.5→1.5	8,100	27	2,606	10.9	32.1	5月1日
	0.5→1.5	5,400	26	1,372	12.5	25.4	4月28日
	0.5→1.5	8,500	28	1,699	12.8	19.9	5月2日
	0.5→1.5	9,200	28	2,249	12.6	24.4	5月2日
昭和57年	0.5→1.5	1,200	33	165	12.9	13.7	4月15日
	0.5→1.5	7,200	32	473	12.9	6.5	"
	0.5→1.5	3,600	31	132	12.9	3.6	"
	0.5→1.5	4,500	31	1,092	13.0	24.2	5月4日
	0.5→1.5	6,000	30	2,100	13.0	35.0	"
	0.5→1.5	14,500	29	4,740	13.0	32.6	"
	0.5→1.5	3,000	28	253	14.2	8.4	5月13日
	1.5	18,000	27	2,430	11.8	13.5	"
	1.5	19,000	28	2,651	11.7	13.9	5月18日
	0.5→1.5	5,500	26	1,733	13.3	31.5	"
0.5→1.5	7,500	25	1,110	12.6	14.8	5月27日	
昭和58年	1.5	3,000	35	703	22.5	23.4	4月28日
	1.5	5,500	30	1,243	20.0	22.6	4月30日
	1.5	7,000	28	277	22.0	3.9	"
合 計		136,700		27,028		19.7	

3. マダラハタ
 マダラハタは昭和56年から自然産卵により少量ではあるが、受精卵を得ることができ、昭和57年度からは大型水槽による養成とホルモン剤を使用することによって正常な受精卵及びふ化仔魚が大量に得られることが可能になった。種苗生産についてはマダイ等の飼育技法を応用し、シオミズツボムシ(S型)を主な餌料として飼育した。種苗生産結果については表7に示す。昭和57年度は28試験区のうち3試験区については低率の歩留りながら若干の稚魚を生産することが出来たが残りの25試験区については日令5~19にかけて尾数激減のため飼育を中止した。昭和58~59年度は15及び7試験区で飼育を試みたものの日令6~16にかけて尾数が激減したため飼育を中止した。マダラハタ仔魚の大量減耗は開眼、開口する日令2から日令8の間、主に日令5~6に大量斃死が生じている。斃死魚は水表面に浮いた状態のものもあるが、ほとんどは水槽底に沈下、斃死魚の消化管内容物を検鏡の結果、空胃の個体がほとんどであった。水表面での斃死魚は粘液につつまれており、その中には10~20μの大きさの原虫が多数確認できたが、この原虫の出現